

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.25 Dec. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年12月20日

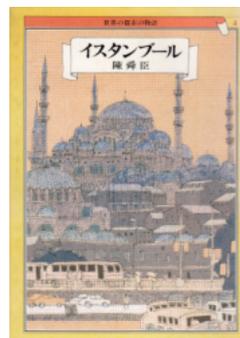
## 担当は自分で決めた『世界の都市の物語 4 イスタンブール』

陳舜臣さんは、文藝春秋社発行『世界の都市の物語』全16巻の内、『4 イスタンブール』(1992年発行)と『16 香港』(1997年発行)を執筆されています。前号で『香港』を取りあげましたので、ここでは『イスタンブール』について記述します。

ところで、陳さんは、4回、イスタンブール旅行をされています。最初は、1982年の9月から10月にかけてのNHK「シルクロード」取材でした。2度目は、1986年8月の国立民族学博物館の松原正毅氏ら

との旅行です。3度目は1991年5月から6月にかけて、『イスタンブール』の取材旅行でした。そして4度目は、1994年の5月から6月にかけて、シリア、トルコ、イスラエル、エジプトなどをめぐっておられます。(編集委員 橘雄三)

文藝春秋社版表紙→



### 寛容なる都 イスタンブール

稲畑耕一郎 『イスタンブール』についてうかがいます。これは、文藝春秋の「世界の都市の物語」シリーズに書かれた作品ですね。陳さんがイスタンブールを担当されたのは……。

陳舜臣 私自分で決めたんですよ。このシリーズは、猿谷要さん、木村尚三郎さんと私の三人が編集委員になってテーマの企画から、だれに何を書いてもらうかといったことを合議したんです。その特権を行使してね。

おそらく文春の担当者は、私に北京をやらそうと思っただけですわ。そうはさせんぞと……(笑)。私はすでに『北京の旅』を書いているしね。イスタンブールを書きたいと、これはばくのだって、つばをつけた。で、北京は竹内さんにお願ひしたんです。

私がイスタンブールに何回か行っていることは、猿谷さんも木村さんも知っていますからね、異議なしです。

稲畑 それじゃ、これはずいぶん楽しみながらお書きになった……。

陳 そうです。

稲畑 ビザンティン帝国のコンスタンティノープルからオスマン・トルコ帝国のイスタンブールへと、そうした歴史を踏まえてですね。

陳 もちろんです。私はイスタンブールというのが好きなんです。行く前から好きでしたけれども、行って改めて好きになったし、帰った後もさらに好きになってね。

稲畑 たいへんな惚れ込みようですね(笑)。



イスタンブールのシンボル聖ソフィア大聖堂もと、キリスト教寺院。四囲の尖塔はオスマン帝国時代にイスラム寺院として加えられたもの。現在はアヤ・ソフィア国立博物館

画像はrekishihodan.seesaa.netより

陳 私はオスマン・トルコは、いい帝国だと思うんですよ。末期には、第一次大戦でドイツにくみしておかしくなりましたがね。最盛期にはバルカン半島から中東、そしてアラブの一部と広大な地を支配下に治めたけれども、その統治は実にゆるやかだったんですね。宗教にも寛大でした。オスマン朝はイスラムですが、征服

地の人びとに改宗を迫るようなことはなかった。

稲畑 その象徴的なのがミット制度ですね。これまでこの対談で、陳さんから何回もその話をうかがいました。

陳 (中略)オスマン帝国は、もともとはトルコ系の王朝ですが、版図の広がりにつれて多民族国家になっていく。するとどうしてもコスモポリタンの性格が強まってきます。人材登用にしても、エリートになるのはムスリムであって、その人の民族は問わない。(傍線は編集委員の加筆)

『陳舜臣中国ライブラリー26』 「自作の周辺」より

## イスタンブール及びオスマン帝国年表

前7世紀	ギリシア人がこの地に、植民市ビザンティオン(ラテン語表記ではビザンティウム)を拓く
330	ローマ帝国皇帝コンスタンティヌス1世、ビザンティオン(ビザンティウム)に遷都、コンスタンティノープルと改称
610頃	マホメット、アッラーの啓示を受ける
1204	第4回十字軍、コンスタンティノープルを占領、ラテン帝国を建てる(~61)
1402	アンカラの戦い。オスマン帝国、ティムールに完敗
1453	オスマン帝国メフメット2世、コンスタンティノープルを陥し、新首都とする
1520	オスマン帝国、スレイマン1世即位(~66)
1529	オスマン帝国、第1次ウィーン包囲
1538	プレヴェザの海戦。オスマン艦隊、キリスト教連合艦隊を破る
1541	オスマン帝国、ハンガリーを征服。ウィーン攻撃
1571	レパント沖の海戦。オスマン艦隊、キリスト教連合艦隊に破れる
1683	オスマン帝国、第2次ウィーン包囲、失敗
1699	カルロヴィッツ和約。オーストリア、ロシアほかとの講和条約。オスマン帝国、ヨーロッパ領土の半分を失う
1830	ナヴァリノ海戦。オスマン艦隊、英・仏・露連合艦隊に破れる。ギリシア独立
1839	オスマン帝国アブドゥル・メジト1世、西欧的近代化を目指し「ギュルハネ大憲章」発布。これにより、「タンズイマートウ・ハイリエ」(恩恵改革)開始(~76)。しかし、イスラム体制の抵抗強く、十分な成果がなかった
1876	オスマン帝国アブドゥル・ハミト2世、ミトハト憲法を発布。宰相ミトハト=パシャが起草、トルコの民主化をはかったものであったが、1877年、ロシア=トルコ戦争が起こると廃止
1877-78	ロシア=トルコ戦争。16世紀から11回戦われた。背景に、黒海北岸の支配権、ロシアの地中海への南下政策などがあった。この時の戦争で、ロシアの優勢が決定的となったが、→サン=ステファノ条約→ベルリン条約
1878	ベルリン条約。オスマン帝国、ルーマニア、セルビア、モンテネグロを失う。キプロス島をイギリスに割譲。ロシアの南下政策は挫折
1914	第1次世界大戦勃発。トルコ・ドイツ同盟成立。
1918	トルコ、連合軍に降伏
1919	パリ講和会議。トルコ革命始まる。ケマル・アタチュルク、サムスン上陸、連合軍を領土から撃退
1922	オスマン帝国滅亡。スルタン制廃止。1924年、カリフ制廃止
1923	トルコ共和国樹立。ケマル・アタチュルク大統領となる。アンカラ遷都
1939	第2次世界大戦勃発。トルコ、初めは中立政策
1945	2月、トルコ、対日・対独宣戦布告。戦勝国として大戦を終える

### 《 コンスタンティノープル陥落 》



1453年のオスマン帝国によるコンスタンティノープル攻略について、よく語られるのがオスマン艦隊の山越えです。これについて、金角湾北側ガラタを居住区としたジェノヴァ人との関係について、陳舜臣さんは『イスタンブール』(文藝春秋社版 p.110)で次のように記述しています。

「メフメット二世の艦隊陸あげ作戦は、そのすぐそばでおこなわれたはずなのだ。丘陵があるとはいえ、帆柱も倒しきらずに山越えする艦隊が、塔から見えなかったのであろうか？民家はほとんどなかったかもしれないが、ガラタのジェノヴァ人たちは警戒態勢にあったはずなのだ。ひょっとすると、彼らは艦隊の山越えを、見て見ぬふりをしたのかもしれない」



rekishihodan.seesaa.netより



『イスタンブール』より

## 陳さんがオスマン帝国最頂(びいき)なのは？

陳舜臣さんが、「オスマン帝国はコスモポリタンの性格を強く持っている」とおっしゃるとき、そう判断される根拠に、「民族、宗教に寛大」ということがあります。文藝春秋社版『イスタンブール』から、そのような箇所を引用します。

「メフメット2世が手に入れたときのイスタンブールは、戦火による被害もあったが、戦争を前にして避難した住民も多く、まちはさびれはてていた。彼の第一の目標は、まちの復興、そしてさらなる発展であった。推定人口十万ほどだったのが、半減していたのである。メフメット2世は、アナトリアやバルカンなどオスマン・トルコ領に住む裕福なトルコ人、ギリシア人、アルメニア人、ユダヤ人、ブルガリア人、セルビア人などを、強制的にイスタンブールに移住させた」(p. 126)

「雑多なグループがイスタンブールに住むことになり、オスマン・トルコ政府は、彼らに宗教別の自治を認めた。(中略)それが「ミット」制と呼ばれるもので、イスタンブールでは、ギリシア正教徒、アルメニア教会信徒、ユダヤ教徒の三つのミットがよく知られていた」(p. 126)

「イベリアに移住したユダヤ人は、中世において世界のユダヤ人の半数を占めたといわれるが、彼ら

はイスラム政権下で平和に暮していた。だが、1492年、レコンキスタ(再征服。国土回復戦争)に成功したカトリック勢力(これがスペイン帝国となる)は、ユダヤ人に改宗を迫ったが、それを拒否した者には追放令が出された。その数は二十五万であった。メフメット2世はすでに他界していたが、その子のバヤジット2世(在位1481-1512)の君臨するオスマン・トルコは喜んで彼らをうけいれた」(p. 129)

「パレスチナ問題をめぐって、イスラエルとイスラムとは不倶戴天の仇のようになっているが、じつは両者は歴史的に友好関係を長く結んできたのだ。ユダヤ人が苦難に面したとき、救いの手をさしのべたのが、ほかならぬイスラムの人びとであったのだ」(p. 240)



レコンキスタでイベリア半島最後のイスラム王朝となったナスル朝のアルハンブラ宮殿 keisen.ac.jp より

## オスマン軍のウィーン包囲とカフェの発祥

増谷英樹『歴史のなかのウィーン』(1993 日本エディタースクール出版部)より引用します。文中下線は編集委員の加筆です。

「ヨーロッパの地図をよくながめてみると、ウィーンという都市が思ったよりもはるかに東南に位置していることに気づくだろう。それはこのウィーンという都市が、キリスト教ヨーロッパの東南の守りとして発展してきた歴史に由来している。事実、1529年と1683年の二度にわたるオスマン帝国軍の襲来に対する最後の拠点がウィーンであったし、その城壁によってキリスト教ヨーロッパが辛くも支えられたのである。つまりウィーンは、ドナウ河を背後にして高い城壁に囲まれた一種の軍事都市であり、同時に東ないし南との交易を主体とした商業都市でもあった。

1529年のオスマン軍の襲来の時期までは、城壁の外からすぐに建物が建っていたが、そこから大砲を打ち込まれた経験から、城壁の外側には300メートルの斜堤が設けられ「グラシ」と呼ばれるようになる。とくに1683年のオスマン軍のウィーン包囲は、キリスト教ヨーロッパ

の危機とみなされ、ローマ教皇の檄によりフランスを除くヨーロッパ連合軍が形成され、ようやくオスマン軍を追い払うことができた。

このときにオスマン軍の陣営に残されたコーヒーが、後のウィーン文化を支えるカフェの発祥につながったといわれる



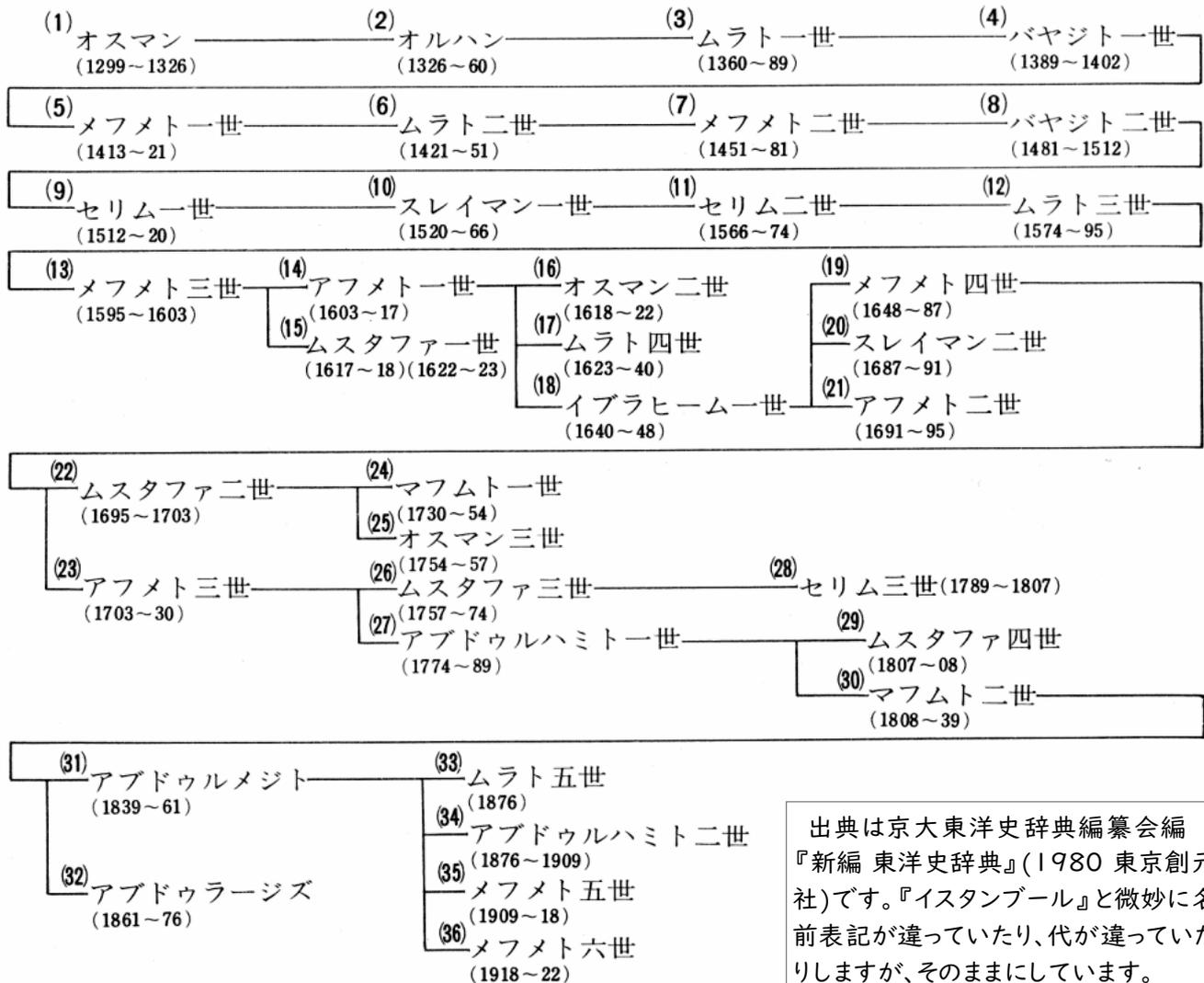
オスマン帝国の第2次ウィーン包囲  
齊藤優子『オスマン帝国600年史』(2014 KADOKAWA)より

# オスマン帝国歴代皇帝

『イスタンブール』で一番名前がよく出てくるのは、1453年、東ローマ帝国の都、コンスタンティノープルを陥したオスマン帝国皇帝メフメット2世で、次は、オスマン帝国の最盛期を成したスレイマン1世です。三人目といえば、祖国解放運動を成功させ、トルコ共和国を樹立したケマル・アタチュルクで、更に一人付け加えたとしたら、330年、都をビザンティウムに遷した、ローマ帝国皇帝コンスタンティヌス1世です。

ところで、オスマン帝国の皇帝は、初代のオスマンから最後のメフメット6世まで36代です。この系図を掲載するかどうかわ迷ったのですが、調べますと、陳舜臣さんは、その内の33人、つまり、ほとんど全員に言及されています。そういうことならと下に掲載いたしました。

## オスマン朝トルコ帝国



出典は京大東洋史辞典編纂会編『新編 東洋史辞典』(1980 東京創元社)です。『イスタンブール』と微妙に名前表記が違っていたり、代が違っていたりしますが、そのままにしています。



ヴァレンスの水道橋 Wikipediaより

ある。(『イスタンブール』100頁)

ビザンティウムの遺跡といえ、まちなど真ん中を通っているヴァレンスの水道橋が、イスタンブールの名所となっている。コンスタンティヌス一世のとき工事に着手し、ヴァレンス帝の三七八年に完工したといわれ、千メートルあったのが、いまは八百メートルほど残っている。イスタンブールは、じつはローマとおなじように、七つの丘をもつといわれているほど起伏がある。その丘と丘とのあいだをかけ渡して水を通すために、二層のアーチの水道橋をつくったのだ。よくも残ったものだと思う。だが、じつはオスマン・トルコ時代もけっこう利用していたのである。

### イスタンブールの ビザンティン遺跡